

片マヒ自立研究会 100 回記念を祝し感謝

野坂 允

私は、平成 11 年 11 月に杖をつき装具付きの靴を履いて退院した。その後は、妻の介護で通院し、検診とりハビリを続け、自宅では自分なりに機能回復を図った。

なぜ自分がこんなに苦しい目にあうのかと、時には怒り、時には憤り、悶々とした生活を送っていた。家の中も暗澹としていた。妻はこの状態を憂いて、知人の話から自立研究会への出席を勧めた。

12 年 12 月、妻に県民センターの会場入り口まで送ってもらった。研究会の日程が進み、クリスマスも近いということで歌を歌いながらプレゼントを交換し合う催しがあり、直ぐ打ち解けることが出来た。

それからは、すすんで参加するようになり出席回数が増えるにつれ、会員一人一人の様子がわかってきた。中でも、主宰者の会長、そして会の運営を支える事務局の方々のほとんどが 50 代という、それぞれの職場で重責を担い、目覚ましい活躍をされ、輝かしい前途を約束されている目前で発症されたとのこと、それはもう無念の至りだったろうと痛感した。それにもかかわらず発想の転換をされて、自立研究会を立ち上げて、会の目的にもあるように脳血管障害者の自立意識高揚の場として活動を展開された。

特に主宰者である森山会長は

○ 機能回復の手立てや実践の具体例

○ QOL を高めるための資料

を毎回用意され、理論的にかつ分かり易く講話された。

そして、会員相互の会話を通して一人一人の人生経験に基づいた知識、技能、創意工夫、努力等が披露され、直接交流し合うことによって肌で実感することが出来た。

そのうちに私は、「こころ」が変わり始めた。そして体も変わった。「こころ」と体が変わり暮らし方や生き方も今までと違って変わってきたようだ。

杖なし装具なしで一人でどこへでも行くことが出来るようになり、講演会、催し、見学会と出かけ、行動範囲が広まった。そして、何でも話し合える先輩、同輩ができた。社会が広がった。家族もそれぞれ自分の生活を取り戻し行動するようになった。

そんな中、私は、親戚関係やまわりで冠婚葬祭が次々とあり、研究会への出席が途絶えてしまった。しかし、研究会は欠かさず毎月例会を持ち続けられた。そして、記念すべき 100 回を迎えることになった。大変素晴らしいことである。

会員の中には、後から発症した人たちへの貴重な本を出版されたり、地域を中心とした会を立ち上げ、独自の活動を始めた方もある。また、障害者がより良い社会生活が出来るよう関係機関に働きかけている方もいる。

まさしく、片マヒ自立研究会が発展し、会員一人一人が自立を果されていることに拍手を贈り、私も会員の一人として深く感謝している次第である。

